予言＝権力

――安部公房『第四間氷期』論――

中野和典

一

『第四間氷期』は一九五八年七月から翌年三月にかけて「世界」に連載された。[1]〈空想科学小説〉と銘打ったこの小説には[2]一九五〇年代の工学や生物学を想像的に発展させた科学技術が随所に描き込まれているが、これについて磯田光一は二つの重要な問題を指摘している。[3]その一つは一九五〇年代に実用化が進んだ電子計算機[4]に関わるものである。磯田は予言機械を開発した勝見が機械から死刑を宣告されるという小説の結末に〈未来予測という観念が未来予測の機械を通じて異様にふくれあがり、そこに提示された未来のリアリティのために、現在の日常的な価値観念が相対化される〉という未来予測と現在認識の実在性（リアリティ）の転倒を読んだ。

この転倒自体は、安部公房が「あとがき」で〈日常の連続感は、未来を見た瞬間に、死ななければならないのである〉と語ったことであり、後にクリストファー・ボルドンによって〈複製品が自分の原型までも抹殺して、完璧なシミュラークル（シミュラークル）になる〉[5]という複製（勝見の第二次予言値）と原型（オリジナル）（勝見）の実在性の転倒として捉え直されることであるが、磯田の功績はそのような転倒を成立させるものとして電子計算機を位置づけたことにある。予測はあくまでも予測に過ぎず、未来そのものではないのに、なぜ〈未来を見た〉と思うほどに予測への信頼が高まるのか。田木繁は死刑を宣告された勝見が〈どうして抵抗を試みなかったのか〉を問うたが[6]、より重要なのは、なぜ予測が〈まだはじまってもいない未来に、現在を裁く権利なんかないはずだ〉（三三）という勝見の抵抗を退けるほどの強度を持ちえたのかを問うことである。

磯田によれば、それは電子計算機が〈未来予測という観念〉を〈異様にふくれ〉あがらせるからである。では、なぜ電子計算機にはそれが可能なのかという問いが次に浮かぶが、この点について磯田は、現代が〈コンピューター的な思考の支配する時代〉だからだと時代状況を指摘するに留まっている。むろん時代状況と作品との関係を検討することは必要だが、『第四間氷期』は作品内に電子計算機への信頼が成立する構造を描いた小説でもある。この構造を分析するこ

とを本論の第一の課題としたい。

磯田が指摘したもう一つの重要な問題は、一九五〇年代にはまだ影響力を持っていたルイセンコ学説[7]に関わるものである。磯田は人間を〈計画進化〉（二一）させて作る水棲人の造形に〈生活環境という後天的な要素が人間を変えうるだけでなく、先天的と思われているものもじつは可変である〉と、人間の可変性を読み取った。そして、この可変性が〈〝遺伝〟が〝環境〟によって変えられることを実証した〉ルイセンコ学説に依拠するものであると指摘したのである。この指摘の妥当性は、後に『第四間氷期』とルイセンコ学説の関係を詳細に検討した鳥羽耕史が、水棲人化の技術を〈まさしくミチューリン生物学による発想〉と結論づけていることからも分かる[8]。ここで磯田が指摘している人間の可変性とは、外界の変化に対する人間の適応力のことである。磯田は〈地球そのものに大きな変動が起って〉も〈人間の肉体〉と〈精神〉はそれに適応する働きを持っているのだと論じた。磯田は陸の水没に合わせて人間が自らを水棲人へと造りかえるという形象を人間の高い適応力の隠喩として解釈したのである。

しかし、水棲人は単に人間の適応力の高さを示すためだけに描かれているのではない。勝見の助手だった頼木は次のように語るのである。

海底植民地の開発には、そうした天変地異のあるなしにかかわらず、それ自体に大きな意味がある。やむを得ないからではなく、それ自体が積極的に素晴らしい世界だからなんだ。ぼくは、海面上昇の問題は、むしろお偉方に覚悟をきめさせるための、いいきっかけになったくらいにしか考えていません。（三四）

頼木にとって水棲人の世界とは陸の水没という外界の変化がなくても実現すべき価値ある世界なのである。磯田は水棲人化を人間の高い適応力の隠喩として解釈したが、小説ではその適応力に特別な価値づけをする言説が描き込まれている。頼木と立場を同じくする山本は次のように語る。

自然との闘いが、生物を進化させたことはたしかです。四つの氷期と、三つの間氷期が、人間をオーストラロピデクスから現代人にまで進化させたことも事実です。（略）しかし、人類は、ついに自然を征服してしまった。ほとんどの自然物を、野生から人工的なものへと改良してしまった。つまり進化を、偶発的なものから、意識的なものに変える力を獲得したわけです……そこで生物が、海から陸に這上った目的も、もう終ったと考えられはしまいか。（略）次は、人間自身が、野生から解放され、合理的に自己を改造すべきではないでしょうか？　これで、闘いと進化の環が閉じる……もはや奴隷としてではなく、主人として、ふたたび故郷である海に帰っていく時がきた……（三五）

頼木らにとって水棲人化とは能動的な進化によって人間を外界からの支配から解放し、より高次の生物的段階へ至らせるという創造的な行為なのである。野生的かつ奴隷的な状況にある人間を能動的な進化によって合理的かつ主体的な段階へ導くというこの発想は進化（エヴォリューション・プログレス）を進歩と同一視する進歩主義である。環境への適応力の高度化を表す進化と特定の目的に向けて段階的に変化することを表す進歩が異なる概念であることはしばしば指摘されるが[9]、〈生物が、海から陸に這上った目的〉を果たした人間が〈主人として、ふたたび

故郷である海に帰っていく時〉に至っているという段階的なモデルを思い描く頼木らは明らかに進化と進歩を同一視している。水棲人の造形にルイセンコ学説に基づく人間の可変性を読んだ磯田の指摘は鋭いが、それだけでは可変性に特別な価値づけをする進歩主義の問題性は見えない。この問題について検討することを本論の第二の課題としたい。

二

『第四間氷期』において電子計算機への信頼を構成しているのは実証性、再現性、照応性という互いに補い合う三つの要素である。まず、実証性とは予測を現実に照らし合わせてその確度を測ることを指す。実証性については勝見たちが開発した日本製予言機械よりもソ連製予言機械の方が優っている。日本製予言機械より数年早く開発されたソ連製予言機械は〈すばらしく正確な天気予報〉(二)に続いて日本を含む自由主義諸国の産業経済面の予測を次々に発表し、それらを〈但し書きの誤差率をはるかに下まわる確度で的中〉(二)させて当該諸国に衝撃を与える。一方、日本製予言機械は〈テレビの中の未来で、コップを割ってみせ〉(二)たり、〈水につけた豆粒の四日後の成長を、ブラウン管に結像させ〉(二)たりする程度の実験にしか公的には成功していない。つまり、大規模な産業経済についての予測に成功したソ連製予言機械に比べて、小規模な自然現象についての予測に成功しただけの日本製予言機械は、実証性において大きな後れを取っていたのである。

ただし、日本製予言機械は秘密裏に勝見の未来も予測しており、それに従って頼木らが勝見を救おうと暗躍していたことが小説の後半で明かされる。そこで勝見は自分の行動が全て予測の範囲を出ていなかったことを知らされるのだが、その的中率は機械をして〈言うこと、なすこと、すべてが予想どおりだ〉(三四)と言わしめるほどに高い。勝見は自覚しないままに自らの行動によって予測の確かさを実証してしまっていたのである。このように日本製予言機械が勝見についての〈私的な未来の予言〉(六)に成功していたことを勘案すれば、その性能が小規模な自然現象の予測に留まらないことが実証されたことになるが、それでも予測の規模は他国の産業経済の予測に成功したソ連製には及ばない。まして水棲人社会の到来という世界規模の予測への信頼については、その根拠を実証性だけで説明することはできないのである。

そこで、再現性によって予言機械への信頼が補強されることになる。再現性とはある機構(システム)の再現能力をもとにその予測能力を測ることを指す。むろん過去の再現と未来の予測とでは捉えようとする時間の様態が異なるが、それでも再現能力が予測能力を測る指標になるのは、ある情報からその元となった現象をどれほど忠実に再現できるかが情報処理能力の精度を測る指標になるからである。例えば「地球シミュレータ」による環境変動の予測が信頼を得るためには、まず種々の観測データに基づいて地球環境を忠実に再現できる性能が求められる[10]。

日本製予言機械の再現能力の高さは死者の人格を再現することによって示されている。勝見たちは予測の実験台に選んだ「男」を殺害した犯人を探すために死体の脳波や感覚器等から得た情報を予言機械へ送り込んで「男」の人格を再現しようとする。〈男は死んでし

まったが、いまこの機械の中に、生きていたときとまったく同じ反応係数をもって再現されているはずだ〉（一四）という手応えを感じた勝見は、機械の〈時間目盛を、二十二時間まえに逆行させ〉（一四）たり〈二時間先にすすめ〉（一五）たり〈時間経過を1／10につづめ〉（一五）たりと〈映画のように〉（一五）時点を移動しながら、そのときどきの「男」の認識を再現することに成功する。このように時間を巻き戻して過去を自在に再現できるという機械の情報処理能力の高さが、早送りして未来を自在に予測することもできるはずだという信頼を生み出すのである。小説で予言機械の再現能力が示されるのは、それが予測能力の高さを示すことにつながるからである。

また、日本製予言機械は勝見の人格も再現している。勝見の「第二次予言値」は勝見についての予測（第一次予言値）を本人が知った場合の勝見についての予測（第二次予言値）であるが、これは勝見が〈君は、予言機械でつくった、おれの合成物というわけか〉（二九）と語りかけている通り、種々の情報から再現した勝見の人格に「自分」の未来予測を知らせることによって造り出されたものである。この第二次予言値は再現性を実証性で補強することで発言力を強化している。すなわち、第二次予言値は勝見についての予測を次々と的中させてその再現能力を実証し、〈先生以上に先生を知っているはず〉（三三）だという信頼を得るのである。こうして第二次予言値の発言力が強まるほど、勝見の発言力は弱まることになるが、これは再現性が両者の間にシーソーのような相関関係を作り出してしまうからである。

このように日本製予言機械への信頼は「男」と勝見の人格を再現することによって補強されているのだが、それでも水棲人社会の到来という予測への信頼を説明するには不十分である。日本製予言機械の実績は実証性・再現性ともに個人の次元を超えるものではないため、世界規模の予測への信頼が成立するにはまだ飛躍がある。

その飛躍を解消するのが照応性である。照応性とは別々の系で作られた予測同士を照らし合わせることでその確度を測ることを指す。予測と現実の照合から生まれるのが実証性であり、予測と予測の照合から生まれるのが照応性である。予測はその確度が出来事の実現によって実証された瞬間に情報としての価値を失う。予測は事前のものでなければならず、実証は事後にしか行えないため、実証性だけを根拠に予測を信じ切ることはできないのである。そこで、予測同士の一致、つまり照応性が求められることになる。小説では友安が日本製予言機械とソ連製予言機械の照応について次のように語っている。

これは、勝見先生もすでに御存知のことなんですが、そら、今朝がたも新聞社から電話があった……太平洋海底火山群の活動化について、共同調査してほしいという、例のソ連からの申入れですな……実を申しますと、頼木さんにお願いしまして、こちらではとうに調査ずみだったんです……いや、たぶん、ソ連のほうでも、おおよその見当はつけておるんでしょうが、そこはそれ、お得意の政治的かけひきというやつで……（三四）

他国の産業経済の動向を予測してみせることで自国製予言機械の性能を誇示していたソ連がなぜ〈太平洋海底火山群の活動化〉については共同調査を申し出るのか。予測技術については世界一を自任しているはずのソ連が、まさか実績に乏しい日本製予言機械に自国の予測を保証してもらおうとしているとは考えられない。〈ソ連のほ

うでも、おおよその見当はつけて〉いるが、それを知らせずに共同調査を持ちかけることで日本政府がどれだけの情報を得ているかを探ろうとしていると考えた方が自然である。このような〈政治的かけひき〉から明らかになるのは、ソ連側の予測が他国に知らせたくない内容のものであるということである。では、その予測とはいかなるものなのか。

そもそも〈太平洋海底火山群の活動化〉について予言機械を使った調査が行われるようになったのは、日ソともに海底火山の活動化によって海水が増え、陸が水没するという「第四間氷期終末説」が唱えられるようになった後である。[11] したがって、〈太平洋海底火山群の活動化〉について予測することは第四間氷期の終末について予測することを意味している。この状況でソ連が予測を隠すということは、予測の開示がソ連の国益を損なう場合、すなわち陸の水没とそれにともなう国際競争の激化が避けられないことが予測されている場合にしかありえない。そして、そのソ連側の予測は頼木らが秘密裏に機械に算出させた日本側の予測と一致しているのである。このように実証性・再現性ともに実績に乏しい日本製予言機械への信頼は規模・確度ともに世界一の実績を持つソ連製予言機械との照応性によって補強されているのである。

ところで、電子計算機の先進国は一九五〇年代に限らず米国であり、[12] ソ連は後進国だったにもかかわらず、[13] なぜ小説ではソ連が先進国として描かれているのだろうか。これは奥野健男が〈モスクワ1号の出現と、それが自由主義国や日本に及ぼす影響、これはスプートニク1号の時の狼狽ぶりを連想させ、軽快な諷刺になっている〉[14]と指摘した通り、人工衛星のイメージを小説に反映させるためだったと考えられる。ソ連が世界に先駆けて人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げに成功したのは『第四間氷期』連載開始の九ヶ月前に当たる一九五七年一〇月。翌月には「スプートニク2号」の打ち上げにも成功している。米国も翌年一月に人工衛星「エクスプローラー1号」を打ち上げたが、ソ連はさらに同年五月に「スプートニク3号」を打ち上げて米国の追随を阻止した。つまり、『第四間氷期』は、ソ連が大陸間弾道弾にも転用できるロケット技術[15]で人工衛星を打ち上げて自由主義諸国に衝撃を与えた、いわゆる「スプートニク・ショック」の直後に成立したのである。この時代状況を合わせ見れば、「モスクワ1・2・3号」というソ連製予言機械の名前が「スプートニク1・2・3号」を連想させるものであり、〈彼らの優位を誇る、大記念碑〉（一七）という予言機械の位置づけが人工衛星のそれと等しいものであることが分かる。また、「第四間氷期終末説」が唱えられる発端が〈せんだっての地球観測年〉（三四）になっていることも、米ソの人工衛星開発競争の発端が地球観測年であったことと一致している。[16] すなわち、『第四間氷期』は一九五〇年代に世界一であったソ連製人工衛星のイメージを反映させることでソ連製予言機械の性能の高さに現実味を与え、それとの照応性を描くことで日本製予言機械への信頼を補強しているのである。

このように『第四間氷期』における電子計算機への信頼は、磯田が指摘した〈コンピューター的な思考の支配する時代〉という時代状況を背景としながら、作品内部に予言機械の実証性・再現性・照応性を描くことによって成立しているのである。

三

こうして信頼を確立した予言機械は、発言力において勝見を圧倒するようになる。

「しかし、機械を、そんなに絶対視してもいいのかな?」

「相変らず、そんなふうに、お考えなんですね?」頼木の声には、驚きと同情とがいりまじっている。

「そういうが、君、誤差というものがあるじゃないか。それも、未来が遠くなればなるほど、誤差もひどくなるはずだ……いや、誤差だけならまだいい……これが、機械の単なる空想ではないと、誰に保証できるだろうか?(略)」

「予想どおりです。先生がいつかは、機械の、予言能力までも疑うようになるだろうと……」(三七)

誤差があり、保証がないがゆえに予言を絶対視してはならないという勝見の反論は論理的には正しいものである。しかし、その反論さえもが〈予想どおり〉のものとして、予言の確かさを示す根拠として回収されてしまう。それは予言が、それへの反論を予言にしてしまう発話行為だからである。予言が〈機械の単なる空想〉かもしれないという勝見の反論は、それ自体が対抗的な予言になっている。すなわち、予言はその正否を判定するのに時間を要するため、それへの反論の正否を判定する時点も先送りになる。発言と判定の時差のために、予言への反論は予言に引きずり込まれる形でもう一つの予言になってしまうのである。したがって、ここでの争点は、機械と勝見のいずれの発言が論理的な正しさを持っているかではなく、いずれの発言者が予言者としての信頼を持っているかということになる。実証性・再現性・照応性によって信頼を確立した機械の予言を覆せるのは、論理的な正しさではなく、機械を超える確度を備えた別の予言だけなのだが、〈単なる技術屋〉(三二)に過ぎない勝見にはそのような予測能力はない。このようにして勝見は機械への反論を封じられ、〈予言機の能力に疑いをはさむことは、すなわち機械の判断に同調したことであり、認めれば認めたで、やはり承認したことになるのだという、まるで裏表が同じメダルで運命を占うような、あの馬鹿気た循環論〉(三五)に閉じこめられてしまうことになる。

この勝見と予言機械の発言力の差は、勝見が小説の語り手であるがゆえに語り手の強度の差として捉え直すことができる。〈機械は、こんな話をした〉(三六及び三八)という勝見の言葉を導入として、予言機械は語り手を超えた語り手として水棲人社会の到来と少年の脱出を語り始めるのである。隈本まり子は〈やがて私たちを待ちうけているはずの、恐ろしい結末を、心のどこかですでに予期していたとでもいうのだろうか〉(二八)、〈互いに見合う最後の顔だなどとは夢にも思わず〉(三〇)といった記述を根拠として語りの時点を〈勝見博士の死をみとどけた〉後と見なし、小説の語り手は勝見ではなく〈勝見博士でありながら自分の死を知っている存在、すなわち博士の第二予言値である〉と論じている。[17] そして、語り手を「第二次予言値」と見なすことによって〈「第四間氷期」という作品にあっては、博士の未来も人間の未来も定められたところから出発している〉という解釈を導き出している。確かに、語りの時点だけに注目すれば、小説の語り手を勝見の「第二次予言値」とする解釈も成り立つだろう。しかし、小説は〈ドアの向うで、足音がとまった〉(三

八〉という暗殺者の接近を示す一文で結ばれており、勝見の死は暗示されるだけで語られてはいないのである。死の直前までを語ることは勝見にもできるので語りの時点を〈勝見博士の死をみとどけた〉後と考える必要はない。何より、もし隈本の言うように〈博士の未来〉と〈人間の未来〉が定まった時点から事後的に全てが語られているのであれば、語り手をもはや「第二次予言値」と呼ぶことはできない。先述の通り、予測は事前のものでなければならないからである。むしろ〈博士の未来〉も〈人間の未来〉も定まっていないからこそ〈機械を、そんなに絶対視してもいいのかな〉という問いは意味を成すのであり、勝見と「第二次予言値」との対立も先鋭化するのである。したがって、小説を統括する語り手はやはり勝見だと考えるのが妥当である。

その勝見を超える語り手として機械が語る第一の予測は、陸の水没によって現代社会が滅亡し、水棲人社会が到来するというものだが、注目すべきは第一の予測の中に既に棲人社会を相対化する因子が挿入されていることである。陸が水没し始めた当初、日本政府は〈国際関係を有利に導くため、極秘のうちに、水棲人間を製造し、海底植民地の開発をすすめて〉(三六)きたことを公表する。海底植民地という呼び名が示す通り、当初、水棲人は陸棲人の支配下にあったが、〈数年後には、法務、商務、工務の三代表が、水棲人側から政府に加わ〉(三六)るようになり、〈やがて、水棲人間たちは、自分の政府をも〉(三六)つようになる。水棲人社会形成の歴史は植民地状態からの独立の歴史でもあったのである。

鳥羽耕史は水棲人の子供たちが〈まぎれもない日本人の顔〉(三四)をしており、水棲人語の文法が〈日本語と同じ〉(三四)であることから〈ミチューリン生物学によってつくりだされた彼らも、全く別種の動物になったわけではなく、やはり日本人である〉と解釈し、〈日本の革命を描くことこそが、この小説の核心であった〉と論じている。[18] 機械の予測が水棲人社会の到来に留まり、頼木らにとっての〈素晴らしい世界〉の成立を描き出すだけだったならば、水棲人たちの〈革命〉に積極的な意味を見出す解釈もできるだろう。しかし、第一の予測は次のように結ばれているのである。

しかし彼等にも、一つだけ、悩みごとがあった。それは、何万人かに一人の割であらわれる、妙な病気である。どうも、悪い遺伝らしかった。もしかすると、あの第一代目のイリリがもっていた、外分泌腺の遺伝かもしれない。当局は、地上病と名づけて、みつけしだい手術することにした。(三六)

地上病とは〈他の外分泌腺と一緒に、涙腺もなくなっ〉(三四)た水棲人に、その痕跡があらわれるという遺伝病である。〈肺と一緒に、横隔膜も退化し〉(三四)て泣きも笑いもしなくなった水棲人たちは、陸棲人には〈おおよそ見当もつかないような、まったくちがった〉〈別な心〉(三四)を持っているが、この地上病があらわれると〈陸の心〉(三四)の〈不完全燃焼〉(三四)が起こり、海中での社会生活に支障を来すのだという。これを聞いた勝見が〈それみなさい!〉〈こんどは、やつらが、地上に悩まされる番だ!〉(三七)と叫んでいることに表れている通り、地上病の予測は現在の価値観念に執着する勝見の立場を援護するものに見える。この病が水棲人社会の不完全さを露呈させるものであることは確かである。もし予測が勝見に敗北を認めさせるためだけに語られているのならば、〈地上病〉について語るのは明らかに余計なことなのである。

機械による第二の予測は、地上病を発症した少年が水棲人社会を脱出するというものだが、注目すべきは水棲人社会の相対化が第一の予測より徹底されていることである。機械は水棲人たちが自らを陸棲人より進歩した人類だと明確に位置づける歴史を学校や博物館で教えるようになることを予測する。

地上人そのものはべつに珍らしいものではなかった。博物館の空気室に行けば、いつでも自由に見ることができる。昔のままだったといわれる、家具調度の中で、重力という鎖をひきずりながら、ぎくしゃくした身のこなしで、床にはいつくばっている、みるからに生気のない動物。肺臓という空気ボンベをしょいこんでいるために、いかつくはった、不調和な上半身。ただ普通の姿勢を保つためだけに、椅子などという、奇妙な道具をつかわなければならない、不自由な生物……とうてい夢などとは縁がありそうにない。芸術科の時間にも、昔の地上芸術が、自分たちのとくらべて、いかに不自由で粗野なものであったかを教わった。（三八）

陸棲人を〈生気のない〉〈不調和な〉〈不自由な〉〈粗野な〉動物と形容しているところに水棲人がいかに陸棲人を下等なものと見なしているかが表れている。〈過去の人類として、大事に保存〉（三六）されることになった陸棲人は、水棲人が自らをより高等な生物であることを確認するための「鏡」として展示されているのである。水棲人が陸棲人に敬意を払うのは唯一その勇気に対してだけである。

荒れはてた、苦難にみちた大地の上で、自分たちの祖先が、傷つきながらも、いかに勇敢に闘いぬいたかは、歴史の本にも書いてあることだ。おくれた認識のうえにたちながらも、彼等はフロンティア・スピリットというものをもっていた。その保守的な心情にもかかわらず、ついには、自分自身の肉体にメスを入れて、水棲人に変身する勇気さえもち合わせていたのである。動機がどうであれ、今日のわれわれをあらしめた、彼等の勇気にだけは、感謝と敬意をはらわなければならないだろうと書いてある。（三八）

ここで語られる〈おくれた認識〉と〈保守的な心情〉は勝見の保守主義に相当し、〈フロンティア・スピリット〉と〈勇気〉は頼木らの進歩主義に相当するものである。水棲人が〈自分自身の肉体にメスを入れ、水棲人に変身する勇気〉だけを讃えるのは、〈動機がどうであれ〉、つまり動機が陸の水没という消極的なものではあれ、自らを水棲人に造りかえたという陸棲人の能動性を彼等が高く評価しているからである。すなわち、水棲人たちの歴史認識は能動的な進化に特別な価値を置く頼木らの進歩主義に似ている。

したがって、陸棲人の中に〈自分たちには理解のできない、何かが無いとは、断言できまい〉（三八）という少年からの批判は、水棲人の歴史認識だけでなく、頼木らの進歩主義にも向けられていることになるのである。小さな事故をきっかけに〈風が皮膚から、何かをうばっていく、あの不安な感じ〉（三八）のとりこになってしまった少年は、水棲人が〈工業用原料以上の意味〉（三八）を与えていない風に、陸棲人はそれ以上の意味を与えていたのではないかと疑うようになる。少年にとって風の特別な意味を確かめることは、陸棲人が〈水中から類推するのとはまるでちがった、特別な世界〉（三八）に生きていたことを確かめることを意味しているのだ。少年は〈風が音楽であるかないか、もう一度、自分でたしかめ〉（三八）る

ために水棲人社会のタブーを犯して陸へ上がる。

最後の力をふりしぼって、はい上った。想像の中では、風の音楽をたしかめるために、地面の上にすくっと立上るはずだったのだが、実際にはい上ってみると、世界のすべての重さという重さを、自分の体が一挙に吸い取ってしまったように、ずっしりと重く、そのまま地面にへばりついたきり、身動きも出来ないのだった。一本の指を持ち上げるだけでも、やっとの有様なのである。（略）

しかし、待望の風は吹いていた。とりわけ、風が眼を洗い、それにこたえるように、何かが内側からにじみだしてくる。彼は満足した。どうやら、それが涙であり、地上病だったらしいと気づいたが、……もう動く気はしなかった。

そして間もなく、息絶えた。

さらに何十昼夜かが繰返され、海はその小島をも飲込んだ。死んだ少年は、波に浮かんで、どこまでも流されつづけた。（三八）

泣かない水棲人であるはずの少年が風に何を感じて涙したのか。その内実は定かでないが、この〈満足〉には彼が風に水棲人の価値観念には収まらない何かを感得したことが表れている。少年は自分の存在を賭けて風の特別な意味を確かめることで〈感覚上のギャップ〉（三八）ゆえに水棲人には見えていない陸棲人の〈内面生活〉（三八）にも独自の価値があることを証明したのだった。これによって水棲人と陸棲人の優劣が、互いに限界を持つ感覚的な差異に基づく観念に過ぎないことが示され、水棲人を陸棲人より優れたものと見なしうると同時に、陸棲人も水棲人より優れたものと見なしうるという等価の構図が成立する。こうして第二の予測は、水棲人を高等生物、陸棲人を下等生物と見なす水棲人の歴史認識と頼木らの進歩主義をより徹底的に相対化しているのである。

この少年の形象については〈見事な抒情的な詩〉[19]や〈叙情的で洗練された美しいもの〉[20]といった肯定的な評価が多くなされているが、助川徳是は〈偏見とは要するに、情緒のステロタイプが、新しい認識に対しておこすアレルギー反応だ〉という安部の発言[21]を引用しながら、この小説では〈どんなアレルギーも拒まず「情緒のステロタイプ」を打ち破るべきであった〉のに〈水棲人の少年のエピソードが、素材にもかかわらずステロタイプ〉になってしまっていると批判した[22]。つまり、水棲人を〈化物〉（二二）と呼ぶ勝見の〈偏見〉は、水棲人化を〈残酷だ〉（三四）と感じる〈情緒のステロタイプ〉が、水棲人を肯定する〈新しい認識〉に対して引き起こす拒絶反応から生まれているが、水棲人の少年が風に涙して陸棲人の〈情緒のステロタイプ〉に寄り添うことで、その拒絶反応を緩和してしまっている。未来と現在の断絶に〈耐えなけりゃなりませんよ〉（三五）という頼木の言葉、あるいは〈未来の残酷さとの対決はさけられまい〉という「あとがき」の言葉通り、〈情緒のステロタイプ〉と〈新しい認識〉との衝突を避けてはならないと言うのならば、少年の挿話（エピソード）によって勝見の拒絶反応を緩和するべきではなかったと助川は論じたのである。

確かに、少年の挿話（エピソード）は勝見の拒絶反応を緩和しているが、しかし、その緩和が水棲人を肯定する〈新しい認識〉ではなく、水棲人と陸棲人を等価のものとする〈新しい認識〉を勝見に突きつけた結果もたらされたものであることを見落としてはならない。水棲人と陸棲

人の優劣を解体する等価の構図は、水棲人に価値を置く頼木らの進歩主義を相対化すると同時に、陸棲人に価値を置く勝見の保守主義をも相対化しているのである。第二の予測を聞いた勝見が、もはや〈それみなさい！〉（三七）と叫ぶことなく、〈陸にはい上った水棲人の少年のように、私の指も、すでに鉛のように重い〉（三八）と無力感を独白するだけなのは、予測が勝見を援護するものではないことを悟ったからである。つまり、勝見の拒絶反応の緩和は、少年の挿話（エピソード）が勝見の情緒を慰撫した結果ではなく、勝見と頼木らの対立を解体した結果生じたものなのである。したがって、拒絶反応の緩和だけを取り上げて批判するのは妥当ではない。

このように予言機械は二つの予測を語ることで勝見の保守主義と頼木らの進歩主義をともに相対化している。では、この立ち位置の中立性にはどのような意味があるのだろうか。

四

この問題を検討するために参照すべき座談会の記録がある。「科学から空想へ」と題されたその座談会は『第四間氷期』連載開始の半年前に、同じく「世界」に掲載されたものである。[23] 先述の「スプートニク・ショック」を受けて〈人間はどう変るのか〉という話題に及んだときに、安部は次のように発言している。

技術が自然よりも人間の方に向って進む場合、たとえば、この次にぼくはそういうことを書こうと思っているのですが、一番大きな変り方は―もちろん妄想ですが―水中生活に人間がもどる場合です。それは胎児のときに人間は鰓があるでしょう。人工で海中生活ができるようになる。温度は差がないでしょう。資源は無限にある。海の方がずっと生活が合理的にできる。地球はだんだん暖くなって、北極の氷がとけて、大きな山の頂上だけが残るということにならないとも限らない。人工衛星に乗ってどこかに行くこともできるけれども、人間を加工して水の中に入れて水中生活をするということも考えられる。そうすると人間の感情も変る。（略）自然よりも人間のほうを変えるという思想、人間の方を適応さして変化させるという考え方が起る可能性がある。たとえば、生産関係の矛盾の解決を忘れた技術主義を一方的におし進めていけばね。それが危険だと思う。

ここで安部は『第四間氷期』の構想を語っているのだが、注目したいのは人工衛星を外界加工の象徴、水棲人を人間加工の象徴と捉えて、後者を〈危険だ〉と述べていることである。そもそも、外界を加工する能力の獲得は、外界への適応の仕方を受動的なものから能動的なものに変えるという、進化論的に見て画期的な出来事であった。一方、今後どれほど人間の身心を加工しても、やはりそれも外界への能動的な適応であることに変わりはない。つまり、加工を外界と人間のどちらへ向けるかという方向が異なるだけで、外界加工と人間加工はいずれも能動的な適応であるという意味では同じものなのである。したがって、どれほど人間を加工しても〈猿が人間に変ったような質的飛躍が、現代人と未来人のあいだにおこる〉ことはないのだと安部は主張する。安部によれば人工衛星は人間の外界加工能力の高さを象徴するものなのであり、〈人間が変る〉という〈神秘的世界観〉を否定するものであるのに、人間加工に〈人間の質的変化〉を期待するのは〈危険〉なのである。このような安部の発

言を受けて、荒正人は人間の加工によって〈超人間〉が出現する可能性があると反論し[24]、武田泰淳は〈そうあるべきだけれども反対だ〉と異議を唱え、埴谷雄高は〈安部君は自然淘汰を適用して、現在の変革の原理を適用していない〉と批判している。

この座談会から分かることが二つある。一つは『第四間氷期』が書かれた一九五〇年代末には、人間の加工がそれなりに現実味のある検討課題と見なされていたということである。これは座談会の冒頭で荒正人が〈人工衛星・人工太陽という技術と一対になっているのが、この人工頭脳・人工生命だといえます〉と述べていることに表れている通り、人間の活動領域を宇宙へ広げた人工衛星の開発が、様々な領域への加工技術の展開を人々に期待させたことが背景にある。

もう一つは、この課題に対して安部が人間の加工によって〈人間の質的変化〉は起こらないという立場を取っていたということである。これは安部が人間の人間たる条件を外界への能動的な適応力に求め、それは外界加工能力を獲得した〈猿から人間への飛躍〉の時点で既に成立したものと考えていたことが背景にある[25]。つまり、安部が問うていたのは、人間加工がどのような価値を造り出せるかではなく、人間加工能力そのものにどれだけの価値が認められるかという問題であった。確かに荒たちの言う通り、加工によって人間の身心を〈改善〉することはできるが、だからといって人間加工能力に外界加工能力を超える価値を認めることはできない。人間加工能力の価値ばかりを強調すれば、〈外部を変革する可能性を閉し〉たり、加工を〈被支配民族に適応〉したりする〈危険〉を招きかねないのである。安部は〈人間の質的変化〉の可能性を否定することによって、人間加工に特別な価値を置く思考を批判したのだった。

このような安部の主張を合わせ見ると、頼木らが特別な価値を置く能動的な進化も、それが外界への能動的な適応に他ならないがゆえに、進化論的には画期的な意味を認められないことになる。水棲人化とは人間加工に他ならず、それに劣らぬ価値を持つはずの外界加工なら陸棲人も既に行っているのである。だからといって、この主張は水棲人を感覚的に拒絶し、蔑視する勝見に寄り添うものでもない。安部は人間加工の価値を強調することの危険性を指摘したが、それは外界加工に人間加工を超える価値を認めていたからではなく、両者に質的な差異を認めていなかったからなのである。すなわち、水棲人と陸棲人の等価性を語る予言機械の立ち位置は、人間加工と外界加工の等価性を語る安部の立ち位置に近い。では、なぜその立ち位置の語り手が他ならぬ予言機械でなければならなかったのだろうか。小説の結末部で勝見は次のように語る。

> 親子喧嘩で裁くのはいつも子供のほうである……たぶん、意図の如何にかかわらず、つくった者が、つくりだされた者に裁かれるというのが、現実の法則なのであろう……　（三八）

勝見が予言機械に裁かれるのが避けがたい〈現実の法則〉であるというこの認識は〈未来を裁く対象としてではなく、逆に現在を裁くものとして、とらえなければならない〉という「あとがき」の言葉に呼応している。そして、安部は我々には〈未来を、否定する資格がないばかりか、肯定する資格もな〉く、〈真の未来は、おそらく、そのような価値判断をこえた、断絶の向うに、「もの」のように現れる〉がゆえに、未来を裁く対象にしてはならないのだと語ってる。これを換言すれば、人間は未来を予測としてしか認識できないので

あり、どのように未来を裁いても、そこで裁かれるのは常に予測であって〈真の未来〉ではないということになる。したがって、水性人社会の到来を肯定する頼木らの進歩主義とそれを否定する勝見の保守主義の闘争も、必然的に予言の闘争にならざるをえない。未来を肯定しても否定しても、そこで語られる未来とは〈真の未来〉ではなく、常に予測でしかないからである。そして、予言を覆せるのはそれを超える確度を備えた別の予言だけなのである。『第四間氷期』において予言機械という信頼の確立と思想の中立を備えた語り手が造り出されたのは、進歩主義と保守主義という二つの予言を超えた地点から人間加工と外界加工の等価性を語るためだったのである。

このように予言機械と安部の立ち位置の近似性を見れば、『第四間氷期』が座談会で語られたような安部の認識を反映した小説であることが明らかになるが、同時にただそれを反映しただけの小説ではないことも明らかになる。それは水棲人と陸棲人、人間加工と外界加工の等価性が示されることによって、それにもかかわらず勝見だけが死刑を宣告されねばならないことの不条理が、より深刻なものとして浮かび上がるからである。

勝見はやがて海底植民地の開発を妨害して〈未来に対する罪〉(三三)を犯すことになるという理由で死刑を宣告されるのだが、彼を裁く頼木らの正当性はどのようにして担保されているのだろうか。頼木は勝見を〈未来の予知には耐えられないタイプの人間〉(一二)だと非難するが、断絶した未来の〈残酷さから、完全にのがれることは、不可能なのだ〉という「あとがき」の言葉が示す通り、そもそも受け容れがたい予測に耐えるのは容易なことではない。もし、勝見にとっての水棲人社会のように、予測結果が頼木にとって受け容れがたいものだったなら、それでも頼木がその予測に耐えられるという保証はどこにもないのである。むしろ、頼木が予測に耐えられたのは、彼が水棲人社会を〈積極的に素晴らしい世界〉(三四)と考える進歩主義者だったからに過ぎないという見方も成り立つ。少なくとも、水棲人社会を否定する勝見と同様に、それを肯定する頼木も〈価値判断をこえた、断絶の向うに、「もの」のように現れる〉未来に向き合っているのではないことは確かである。したがって、頼木らの正当性の根拠は、彼らが勝見にはない未来の残酷さに耐える能力を持っているということには求められない。

頼木らの正当性を担保しているのは予言機械である。そのことは頼木が勝見に〈予言機をとおして、水棲人からあたえられた権利〉(三五)という形で自分たちの正当性を主張していることに表れている。水棲人社会の実現を望む頼木ら進歩主義者と海底植民地を作って〈一儲けしてやろうという〉(三四)財界にとって障害となるために勝見は抹殺されようとしているのだが、その判断の「正しさ＝正当性」を裏づけているのは、機械による予測の「正しさ＝正確性」なのである。頼木らが未来の代理人を自任する前提には、予測を未来そのものと見なす錯覚があるが、その錯覚を生み出しているのが予言機械であることは先述の通りである。

注意せねばならないのは、どれほど高精度の予測であっても、それ自体は単なる情報でしかなく、現実的な強制力は持ちえないということである。それは勝見の第二次予見値が頼木らと結びつかなければ、勝見に対して何の強制力も持ちえなかったことに表れている。つまり、予測は誰かと結びつくことによって、初めて現実的な強制

力を発揮するのである。ここで問題になるのは、そのようにして出現する予言＝権力が、未来そのものでないだけではなく、予測そのものでもないということである。予言＝権力とは、予測技術の主導権を握る者によって情報が選別されるために、予測を忠実には反映せずに現れる強制力なのである。頼木らが水棲人と陸棲人の等価性を示す予測を黙殺するのは、それが彼らの望まない情報だったからであり、それを黙殺できたのは、彼らが秘かに勝見から予言機械の管理者の地位を剥奪して予測技術の主導権を握っていたからである。このように水棲人と陸棲人の等価性が示されながら、勝見だけが抹殺されるという不条理は、予測の掌握と選別によって自らを正当化する予言＝権力のありようを顕在化させているのである。

一九五〇年代に電子計算機が実用化されて以降、機械が予測の確かさを担保し、予測が権力の正しさを担保するという関係は様々な分野に浸透した。その分だけ「不測の事態」は減少したはずだが、代わりに予言＝権力を増大させることにもなった。予測技術が高度化するほど、それへの反論は困難になり、反論が困難になるほど、予測技術を掌握する者に権力が集まる。電子計算機の出現は、予測の精度をめぐる闘争とともに、その覇権をめぐる闘争をも激化させたのである。予言機械をめぐる二つの闘争を描いた『第四間氷期』は、そのような予言＝権力の時代の到来を予言していたのである。

注（1）　初版『第四間氷期』（一九五九・七、講談社）において全面的に改稿されている。再刊（一九六四・五、早川書房）の際にも若干の改稿が見られるが、本稿では『第四間氷期』成立時期の他の言説との関係にも注目するため、ほぼ形が定まった初版を考察の対象とする。なお、初版以降の改稿については鳥羽耕史「安部公房『第四間氷期』―水のなかの革命―」（『国文学研究』一九九七・一〇）で考察されている。引用の後に付す（漢数字）は章番号を表している。

（2）　連載第二回までは表題の前に〈空想科学小説〉と記されている。奥野健男「安部公房―その人と作品―」（『世界ＳＦ全集』第二七巻、一九七一・五、早川書房）は『第四間氷期』を〈作者がはっきりＳＦとして、意識して書いた作品〉として〈日本における最初の本格的長篇ＳＦである〉と位置づけている。

（3）　磯田光一「解説」（『第四間氷期』一九七〇・一一、新潮社）。

（4）　高橋秀俊『電子計算機の誕生』（一九七二・一、中央公論社）によれば一九五五年に米国製の電子計算機が初めて証券取引所等に導入されて以後、日本でも電子計算機の実用化が進んだ。また、気象庁編『気象百年史』（一九七五・三、日本気象学会）によれば一九五五年に米国で電子計算機を用いた数値予報が現業化し、日本でも一九五九年には気象庁にＩＢＭ七〇四電子計算機が設置されて数値予報が現業化した。

（5）　クリストファー・ボルドン「科学（サイエンス）とフィクション、そしてポストモダン―安部公房『第四間氷期』論―」（『昭和文学研究』一九九七・二）。

（6）　田木繁「海底のイーカルス―安部公房『第四間氷期』―」（『新日本文学』一九五九・九）。

（7）　メドヴェジェフ『ルイセンコ学説の興亡―個人崇拝と生物学―』（金光不二夫訳、一九七一・六、河出書房新社）によれ

ば、ルイセンコ学説が決定的に影響力を失うのは彼を支援していたフルシチョフが退陣した一九六四年以降である。

(8) 鳥羽耕史「安部公房『第四間氷期』」(前掲)によれば〈水棲人化という技術の基礎になるのは(略)発生の段階における環境との相互作用である。そうして得られた性質は、遺伝性を変化させ、そのまま子孫に受け継がれていく。これは、まさしくミチューリン生物学による発想なのである〉。

(9) 例えば「現代思想」(二〇〇九・四)所収の松永俊男「日本におけるダーウィン理解の誤り」、北垣徹「社会ダーウィニズムという思想」等。

(10) 詳細は佐藤哲也『未来を予測する技術』(二〇〇七・八、ソフトバンククリエイティブ)を参照。

(11) 一九五〇年代には実際に海面の上昇が観測されていた。日下実男「安部氏と氷河期」(『世界SF全集』第二七巻、一九七一・五、早川書房、月報)によれば〈その頃は、実際に海面が上昇しつつあった。たとえば、一九三〇年以来、アメリカ合衆国の全海岸にそって、海岸陸地測量部の検潮儀には、海面の上昇が感知されてきた。(略)私が安部氏に会った頃は、地球はまだ温暖化の傾向にあり、海面の上昇も、氷河が溶けているせいだろうと見られていた〉。

(12) むろん安部が電子計算機の先進国が米国であったことを知らなかったはずはない。安部公房「アメリカ発見」(「中央公論」一九五七・一一)には〈オートメーションやサイバネティックスのアメリカ〉という記述が見られる。

(13) 市川浩『科学技術大国ソ連の興亡―環境破壊・経済停滞と技術展開―』(一九九六・一〇、勁草書房)によれば〈旧ソ連邦におけるコンピュータ開発は(略)一九四〇年代後半に遡るが、ほとんど経済計画作成や研究用に利用されていたにすぎない。(略)一九六〇年代初頭、旧ソ連邦はコンピュータ・テクノロジーについては西側にたいしてかなりの遅れをとっていた〉。

(14) 奥野健男「日本のSFと安部公房」(『第四間氷期』一九六四・五、早川書房、解説)。

また、草下英明「By・Way―「第四間氷期」について」(「ユリイカ」一九七六・三)も〈五七年十月四日、私達の耳目を揺り動かす大事件が起った。ソヴィエトが世界最初の人工衛星スプートニク一号を地球のまわりに進空させたからだ。この事件は、それまで科学の進歩は常にアメリカがリードしていると信じていた常識を根底からくつがえすものだった。「第四間氷期」の中にもはっきりソヴィエト優位の影響が認められよう〉と指摘している。

(15) 谷川徹三「人工衛星の思想的意義」(「思想」一九五八・三)によれば〈人工衛星は、ICBMや核弾頭と一連のつながりのあるもので、軍事力として利用することのできるものであります。人工衛星のその二重の性格を考えることは、二つの世界の対立と緊張との存する現状においては、絶対に必要なことであります〉。

(16) 糸永英夫「日本でも人工衛星はできるか」(「中央公論」一九五七・一二)によれば〈ソ連とアメリカが今年人工衛星をあげるのは(略)一九五七、五八年の第三回国際地球観測年

の行事として、地球、太陽、及び宇宙に関する物理現象の解明のためである〉。

(17) 隈本まり子「安部公房「第四間氷期」について」(「近代文学論集」一九八三・一一)。

(18) 鳥羽耕史「安部公房『第四間氷期』」(前掲)。

(19) 奥野健男「安部公房」(前掲)。

(20) クリストファー・ボルドン「歌い合う機械たち—安部公房とサイエンス・フィクション」(「文学」二〇〇七・七、内藤由直・友田義行訳)。

(21) 安部公房「『偏見』を育成せよ」(「世界」一九五七・四)。後に「「偏見」を育成しよう」と改題されて『猛獣の心に計算器の手を』(一九五七・一二、平凡社)、さらに「ヘビについてⅢ」と改題されて『砂漠の思想』(一九六五・一〇、講談社)に収録。

(22) 助川徳是「『第四間氷期』」(「国文学　解釈と鑑賞」一九七一・一)。

(23) 座談会「科学から空想へ—人工衛星・人間・芸術」(「世界」一九五八・一)。出席者は安部公房、荒正人、埴谷雄高、武田泰淳。

(24) 荒正人は『宇宙文明論』(一九五七・一二、平凡社)においても〈技術文化の発達〉によって〈人類は、超人間のような新しい生物に進化しているかもしれぬ〉と主張していた。

(25) このような安部の人間観がパヴロフとロスタンの学説に基づくものであることが「人間未来史観序説」(「中央公論」一九五八・六)に記されている。安部にとって進化論は晩年にいたるまで重要な問題であり続けたが、その意義についての通時的な考察は稿を改めて行いたい。

(なかの　かずのり)